

# 近代日本知識人の「母」

——丸山眞男の母、セイを中心に——

半田 侑子

## (1) はじめに

### なぜ母か——問題意識の在処

本稿は筆者が研究代表をつとめる共同研究「近代日本知識人の「母」——丸山眞男・加藤周一・鶴見俊輔の母たち」<sup>(1)</sup>を進める過程での中間報告であり、したがって限定的に丸山の母、セイを中心に論じる<sup>(2)</sup>。

近代日本において知識人とされる存在はそのほとんどが男性であった。したがって近代日本知識人研究はその対象を圧倒的に男性によって占められ、論じる側もまた男性が中心であった。それゆえ近代日本の知識人研究は、知識階級の男性たちによって形成されてきたと言える。その間、家庭を仕事場としてきた多くの女性たちの姿は、男性に比べるとその足跡を追うことが非常に困難である。しかし家庭で懸命に働いた女性たちは、日本社会にとって影響がほとんどなかったと言えるだろうか。

本共同研究は、近代日本知識人を生み育てた母に光をあて、近代知識人たちのテキストを通して、家庭の女性たち、ひいては日本の母たちの姿を再発見したい。本共同研究が対象とするのは、丸山・加藤・鶴見の母である。丸山・加藤・鶴見の付属物ではない、個人としての丸山セイ、加藤ヲリ子、鶴見愛子である。本稿では丸山眞男の母、セイを取り上げる。個人としてのセイ自身を知ることが重要であると考え、本稿では、まず丸山が語った母像からセイの姿を浮き彫りにしたい。

## (2) 丸山セイをめぐる語りと概観

### 丸山眞男にとって「自己を語る」こと

丸山眞男「如是閑さんと父と私」(1985)は丸山眞男が母について語った数少ない資料のうちのひとつだが、この中で丸山は自らの家族史を話すことについて、以下のように語っている。

私はそういう個人的な身内のことを話すのはどうも厭で、自己顕示は最も嫌いなことですけれども、先ほど言いましたように、今回はそういうことでしかお役に立たないと思いますので、止むを得ず丸山家ないし井上家が入ってきますから、悪しからずご了承ください。

実はおやじのことも、本当はもっとよく調べなきゃいけない。〔…〕こちらも年取ったからそろそろ調べようかと思っているのですが、どうも自分の個人的なことを調べるというファイトが、あまりないのです。(「如是閑さんと父と私」1985)<sup>(3)</sup>

この文章からは、丸山が個人的な身内のことを話すのは自己顕示につながると考えていること、父の来歴等の個人史を調べるだけの関心がないことがうかがえる。これはおそらく丸山に限ったことでなく、この時代の男性、特に知識人にとって、自らの両親のことを公に書いたり話したりするのは、公に私を持ち込むという感覚だったのではないだろうか。

さかのぼると、1968年に丸山が個人史を語るためのらいについて書いた文章が残っている。これは古在由重から哲学者・思想家としての経歴と生き方を丸山が聞き役になった対談<sup>(4)</sup>をまとめた際の心境を述べた「対談を終えて」である。丸山の学問に対する姿勢と、個人的なことを語ることに對する葛藤が述べられる箇所であるので、丸山の「語り」

を理解するために該当箇所を少々長いが省略せず引用する。

また一般に学者というものが、自分をいわばナマに露出して「語る」ことに、なにか本能的なためらいや抵抗を感じるのも、個人的な気質だけではなく、「事柄」に仕えるという学問本来の「非人格性」にも根ざしているように思われる。すくなくも、そうした躊躇のうちに、ただ学者の自己隠蔽的な偽善だけを嗅ぎつけるのは、あまりに「自然主義的」な観察というものである。

こういう抽象論めいたことをのべたのは、古在〔由重〕さんを引き出した私の気持ちについて（この対談の冒頭に短く出ているが）、ちょっとコメントをつけ加えたかったからである。つまり私のなかには矛盾した心理があったし、いまでもある。

右にのべた第一の「理由」については、私は昭和思想史において、あの激動期に、学問の「事柄」に第一義的に奉仕しようとしたさまざまの専門領域の人々の生き方がもっとも明らかにされるべきであり、そういう側面への一般の歴史的関心の低さについて、上述のような「理由」はあるけれども、「不当」だと思っている。けれども、他方では、とかく学問をすべて「思想」に還元し、「思想」を「人間」に還元することが流行する現在の風潮にたいしては、私にはその反対の、学問の非人格性という側面を強調したい気持ちもあり、その点では、この対談の冒頭に出て来る古在さんの「自己を語る」ことへのためらいを、同業者としてもっともな事と同感する（小林〔直樹〕氏がきき手になった宮沢〔俊義〕教授もこの企画に強い難色を示されたと仄聞している）。

本来、もっぱらきき役のつもりで引きうけたこの「対談」に私自身の話が時折でて来るのは、とかく「戦前」という名で一括されがちな時代の精神的気候のめまぐるしい推移を理解しやすいようにと

いう、若い読者への配慮からであるが、そのもう一つ底の心情に、学者としての古在さんに一方的に「告白」を強いることへの私自身の後ろめたさがあったからである。（「対談を終えて」1968）<sup>(5)</sup>

研究に関する姿勢について、歿後刊行された『自己内対話』（みすず書房、1998）に収録された1961年以降の雑記帳「春曙帖」に丸山は次のように書く。「〔研究〕は第一義的に対象の研究であって、自己の思想の表出ではない。不可避免的に研究に表現される「思想」と、思想の直接的表出とはレヴェルがちがう」<sup>(6)</sup>。「対象の研究」と「自己の思想の表出」を厳しく峻別する丸山であるからこそ「自分をいわばナマに露出して「語る」ことに、なにか本能的なためらいや抵抗を感じるのも、個人的な気質だけではなく、「事柄」に仕えるという学問本来の「非人格性」にも根ざしているように思われる」のであろう。しかし一方で「学問の「事柄」に第一義的に奉仕しようとしたさまざまな専門領域の人々」の中には丸山自身も含まれるはずであり、丸山が「自己を語る」ためらいを超えて語った動機も上記の文章から推し量ることができる。

丸山が「自己を語る」意義については、松沢弘陽、植手通有、平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談』（下、岩波書店、2016）に収録された平石直昭による「解説」に、丸山を内在的に理解することの重要性と共に詳しく書かれている。平石はこの「解説」において「丸山の著述全体の流れを概観すると、一九七八・七九年頃を境として、色々な分野で「回想」風の論述が増えてゆくことがわかる」<sup>(7)</sup>と指摘している。68年の丸山と、約20年の時を経て『回顧談』の元となる17回の聞き取りに応じた晩年の丸山との心境の変化について平石は、「学問の非人格性に基づく「自己を語る」ことへのためらい」よりも「昭和の激動期に「学問の「事柄」に第一義的に奉仕しようとした」者として、自らの行き方を記録として残す意識が上回るようになったということ」と分析する<sup>(8)</sup>。丸山の「自

己を語る」ことへのためらい」には、戦中・戦後を生きた知識人にとって、自らの回顧談が自己弁護の機会となり得ることを自戒していたという事情もある。しかし丸山は、平石によると、竹内好の日記を契機として、「ありのまま後につづく世代の人たちに書き残す大切さ」を82年に再確認している<sup>(9)</sup>。このような丸山の禁欲的姿勢は、丸山が語った「母」を読む際にも、忘れてはならない。

一方で5歳年下の加藤周一は、自伝的小説『羊の歌』に限って言えば、両親の生家や人生、信仰や政治的態度に言及し、ことに母ヲリ子や妹久子に対する深い愛情を隠そうとしない。丸山が母に対して直接的な愛情の表現は避け、常に抑制のきいた語り口であるところは、加藤と著しい対照をなす。

丸山に目を戻すと、東京女子大学に附置された丸山眞男記念比較思想研究センターの「丸山眞男文庫 草稿類デジタルアーカイブ」には、上述の座談会のための草稿「[如是閑さんと父と私]のためのメモ」<sup>(10)</sup>が所蔵されている。4枚のルーブリーフに綴られたこのメモの冒頭には「大正時代の recollection」と記されており、丸山が単なる個人史にとどまらない時代の証言という面を重視し、その証言のなかに父母を位置付けていたことがわかる。

### 丸山セイ (1884-1945)

旧姓は大庭、井上亀六（のち政教社社主）の異父妹である。セイは山口県阿武郡萩町（現萩市）に生まれる。セイの結婚は、異父兄の井上亀六と丸山幹治が新聞『日本』の社員として机を並べた縁による。この『日本』には長谷川如是閑などもおり、のちの丸山の交友関係にも大きく影響している<sup>(11)</sup>。丸山眞男によると、セイと幹治の結婚は三宅雪嶺が媒酌をしたという<sup>(12)</sup>。「これも全く私事ですけれども、『大阪朝日』に入って間もなく、〔明治〕四十二年の四月に父は結婚しました。〔…〕如是閑さんも父の結婚

には一役買ったようです」<sup>(13)</sup>と丸山が述べるように、セイは異父兄の亀六の交友関係のなかで幹治と結婚したので、セイにとって如是閑は夫の友人であるだけでなく、兄の友人でもあった。

### 丸山家周辺の人物——井上亀六と長谷川如是閑

セイと幹治の結婚は井上亀六が繫いだ縁によることは述べた。それでは、亀六とはどのような人物であっただろうか。

関東大震災の前に『日本及日本人』の中で内紛が起こって、どうもその事情はよく知らないのですけれども、雪嶺が政教社からおん出るといような格好になって、その後、井上亀六が社主になったのです。（「如是閑さんと父と私」1985）<sup>(14)</sup>

個人的なことばかりで申しわけありませんが、井上亀六の父というのは、明治時代の官僚で、その当時の「官員様」ですから、妾を持っているわけです。そこに私の祖母が嫁いでいたのですけれども、亭主の浮気に怒って離縁して長州萩の実家に戻り、あらためて大庭家に嫁いだ、つまり再婚した。それで私の母は大庭姓なのです。ですから、私の母と井上亀六とは父親の違う兄妹ですが、最後まで非常に仲がよかった。むろん井上亀六と父の幹治とは新聞『日本』の同人で友人でしたけれども、井上一族と私たち一家との関係は、私の母を通じて二重に親密だったのです。（「如是閑さんと父と私」1985）<sup>(15)</sup>

実際に井上一族と丸山一家の「親密」さは、子供時代の丸山眞男の日記からも見てとることができる。丸山文庫に所蔵される丸山9歳の頃の日記「小学3-4年生 当用日記帳」（1923）<sup>(16)</sup>には、「井上に行く」という表現が頻繁に用いられ、おそらく亀六ではないかと思われる「をぢさん」

もしばしば登場する<sup>(17)</sup>。1月18日の日記には、「こたつで遊んでたらこたつがひつくりかへつてふとんや木がもえだしたので急いでお母さんたちでけた。後でお母さんにさんざん叱られた。晩をぢさんに大きな上等なたこをかつてもらった」という出来事が記されている。母親がこっぴどく叱った後で、子供に上等なたこを買ってやる「をぢさん」の存在は、子供のみならず母にとっても温かいものだっただろう。丸山曰く、「井上は、「まるで修身教科書から抜けて来たような「人格者」として子供の眼には映っていた——また事実そうだった」。そのバックボーンを形成していたのは仏教であった」という<sup>(18)</sup>。丸山にとって井上亀六は、思想的立場やイデオロギーを異にする「人格者」の存在を印象付けた人物である。

加藤周一も「おじさん」と慕った人物がいる。母方の大叔父・岩村清一である。海軍リベラル派で、戦中には艦隊の司令長官もつとめたこの人物は、母方の祖母・ツタの弟である。岩村はしばしば姉を慕って加藤家を訪れたという<sup>(19)</sup>。成人したのちも母を中心に岩村家との付き合いは続いていた<sup>(20)</sup>。加藤は母方の祖父の影響の濃い幼年時代を送ったことを『羊の歌』冒頭で語っており、大叔父・岩村についても、戦時中冷静に状況を分析しイデオロギーに基づく楽観的なものの見方を廃した人物として描く。丸山・加藤ともに母方の親族の影響下で成長したということができる。

セイと井上亀六について丸山は「母親は伯父一辺倒なんですよ」<sup>(21)</sup>と語るが、セイが尊敬した人物としてもう一人、長谷川如是閑が挙げられる。丸山は如是閑について語った際、小学生の丸山が関東大震災を記録した『恐るべき大震災・大火災の思ひ出』<sup>(22)</sup>を紹介するが、セイが幹治よりも如是閑を尊敬していたこと、その如是閑「でさえ」朝鮮人が暴動を起こしたといううわさを信じたことを印象深く語っている。

ただ、この『思ひ出』で見ると、五日になって母が、「もう家へ帰

らなきやいけない。焼け出されてご飯も食べられない人がたくさんいるのに、寝られるだけでも幸福だから、いやだなんて言うてはいけませんよ、この家にも迷惑をかけているんだから……」と子供たちには言いきかせています。〔…〕

母は非常に如是閑を尊敬していたのです。内心はうちのおやじよりも尊敬していたのじゃないでしょうか。その点、おやじもコンプレックスがあったように思うのですよ。女房が友人の如是閑を旦那より尊敬していたというのは……（笑声）。如是閑もまた、「君のおっかさんは偉い人だった」などと私には言っていましたけれどもね。

それは別にして、母が後日談として、こう言いました。「あのときは、長谷川さんでさえ朝鮮人のうわさを信じたんじゃから……」。この「長谷川さんでさえ」という表現が、一方でいうと、いかに母が、如是閑を尊敬していたかを示しています。おやじの方は情報にすぐ動かされるおっちょこちょいなところがあって——新聞記者だからということもあるでしょうが——おそらくもっとナイーブにうわさを信じたのでしょう。パニック状態における流言飛語がどんなに恐るべき作用を持つかの好例ですが、「長谷川さんでさえ……」という表現で後日、母が語ってくれました。（「如是閑さんと父と私」1985）<sup>(23)</sup>

関東大震災の経験と母の「長谷川さんでさえ」という言葉は、丸山にとって分かれ難く結びついていたに違いない。「パニック状態における流言飛語がどんなに恐るべき作用を持つかの好例ですが、「長谷川さんでさえ……」という表現で後日、母が語ってくれました」という丸山の言葉は、どれほど尊敬する人物でも無謬ではないという事実に向け、冷静に事象や対象を観察し軽佻浮薄に陥らないための警句として読むことができる。その視点を少年だった丸山に提示したのはセイであった。

### (3) 母としての丸山セイ

#### 母の苦勞

幹治と結婚し、四兄弟に恵まれたセイであったが、家庭生活は順風満帆とは言えなかったようである。丸山は母の苦勞について、以下のように語る。

僕のお袋くらい苦勞した人はないと思うけれども、日本の母というのはおそろしく苦勞しているものですね。僕は子供のときに、親父を憎らしいと思ったな。家庭での態度が実に横暴なんです。ほとんど新聞記者で、しかも転々としているのですからね。〔…〕

それで中学時代は、親父は朝鮮〔筆者註：1925年『京城日報』の主筆として京城へ赴任〕でしょう。それからあとは『大阪毎日』でしょう。一年に数回帰ってくるだけで、一番上の兄貴が大学、僕が高等学校、次〔矩男〕は中学というのがめじろ押しに並んでいるのをお袋一人で切り盛りしなければならないわけで、大へんな苦勞だったわけですね。経済的にも実に苦しかった。親父が一番下の弟〔邦男〕が大学へ入ったときかなんかに、小生もこれで一家心中を免れ申し候と書いたというけれども、新聞記者は経済的に恵まれなかったですね。だからそのしわ寄せはお袋にかかってくるわけで、実に気の毒だった。親父はものすごいかんしゃく持ちで、かんしゃく起こすとどなりちらして、見さかいなくなっちゃうのです。だから手がつけれなかった。それを見ていたから、親父は社会的には一応りベラルで、実際そのために出世コースからは損もしているが、うちへ帰ると実にひどいということをもって感じたな。実に封建的というか、家父長的というか、ひどいのだ。お袋はずいぶん苦勞したと思うのです

よ。(「1月13日丸山眞男先生速記録」1959)<sup>(24)</sup>

幹治が社会的にはリベラルだったが、家庭では横暴だったという記述は、以下にも繰り返される。

その点、親父〔丸山幹治〕は全くりベラルです。家庭では、おふくろに対して実に横暴で、天皇制中の天皇制、暴力もふるう。だから、子どもたちはアンチ親父になってしまう。だけど、社会的には少なくともリベラルで、子どもにもなんにも押しつけないのです。しかも、親父は離れていて、ぼくら兄弟は、ほとんどおふくろに育てられたようなものです。京城にいたり、大阪にいたりしましたから、親父と一緒に過ごしたことは非常に少ない。ですから、そういう精神的重圧みたいなものは感じなかった。(『定本 丸山眞男回顧談』(上))<sup>(25)</sup>

「ぼくら兄弟は、ほとんどおふくろに育てられたようなもの」と丸山は振り返る。幹治が京城に単身赴任して以降、一人で家庭を切り盛りしていたセイの苦労は想像するにあまりある。また、経済的な苦労に加え、兄の鐵雄が「ほんとうの不良」になりかけるなど、子供たちに関する心配も絶えなかったようだ。兄と母に関して丸山は「おふくろがあれだけ厳しかったのは兄貴の場合にはよかったのではないかな。すれすれのところで踏み止まった。おふくろはプロマイドをぜんぶ押収して庭で焼いたんですから。すごく厳しいところがある。ダンスの教本もおふくろに取り上げられた」<sup>(26)</sup>という。

セイに心配をかけたという点では、丸山も「唯物論研究会」の如是閑講演会に出かけて行き、検挙され、それ以降特高にマークされる。

私の場合、いくら調べたって何も出てこない。事実、何もやって

いませんから、出て来るわけがない。そこで、このときは間もなく釈放された。しかし、写真をとられ、指紋をとられ、これでブラックリストに載ってしまったので、それ以後特高との長いおつきあいの時代が始まるのです。

そのころホッケー部にいたので、私は釈放されるときに、うちの方には知らせないでください、と言ったら、特高は「ああ、いいよ」と言った。そのまま寮に帰ったら、部屋の友達がどこへ行ってたんだと訊くわけです。もちろん、つかまっただとは言えないので、何とか言ってごまかした。その後も私は黙っていたので、うちでは知らなかった。そうしたら大学二年のときにいきなり特高がうちに訪ねて来た。母は仰天して真青になりました。（「如是閑さんと父と私」1985）<sup>(27)</sup>

そういう意味では、特高につかまってマークされていることを、なまじっか〔筆者註：南原〕先生に全部話してしまったものだから、先生に迷惑をかけているのです。そのことは、先生以外には話していません。迷惑をかけたのは南原先生とおふくろだ。ずっと後になって、助教授になってからだけれど、例の安井<sup>かおる</sup>問題で法学部が真っ二つに割れたとき、「辞める」という田中耕太郎先生に留任してくれと口説きに行ったのです。夜中の二時になってしまい電車もなくなった。タクシーのある時代ではないでしょう。目白の田中先生のお宅から西高井戸の自宅まで歩いて帰った。家へ帰ったら三時半ごろです。そうしたら、まだ家に明かりがついていて、親父とおふくろが火鉢にあたっている。親父が「なんだ眞男、お母さんを見ろ」と。おふくろが涙を流しているんです。ぼくが捕まったと思っている。「いちいち心配されたらかなわないよ」なんて、ぼくは即座に反発したけれど、そういう意味では、ずいぶん親不孝をしま

した。(『定本 丸山眞男回顧談』(下))<sup>(28)</sup>

幹治が息子の帰りを待つセイに付き合い、「お母さんを見ろ」と促すほど、セイは丸山のことを心配していたのだろう。親が子を心配することは時代と国を問わず、普遍的な感情であるが、丸山の時代は特高に検挙され虐殺される恐れがあった。

このようなセイの息子を思う気持ちは、丸山の記憶に残っている。助手時代の丸山が授業の準備をする際のエピソードは、母と子の普遍的な姿のひとつだろう。

講義の準備は毎回徹夜で、冬は辛かった。西高井戸の親父の家の電話部屋で、おふくろが炬燵の周りに座蒲団をいっぱい立てかけて、背中に毛布みたいなものをかけて固めてくれるのです。隣で母は寝ているのです。炬燵だけが暖房ですから寒かった。(『定本 丸山眞男回顧談』(下))<sup>(29)</sup>

## 「教育ママ」

丸山の語りから浮かび上がるセイは、生真面目で勤勉で愛情深い人物であったようだ。その一方、丸山の回想によれば、セイは一種の「教育ママ」でもあった。

私の母というのは「躰<sup>しつけ</sup>がきびしい」という点では、いま言われているのとちょっと意味が違うけれども、一種の「教育ママ」で、学校の成績もしっかりしなさい、という方でした。何か学校時代はトップだったようです。ところが、父の方は徹底して、学校なんてどこでもよく、また成績などはテンデ問題にしない。(「如是閑さんと父と私」1985)<sup>(30)</sup>

丸山はしばしば父と母の違いとして、子供に対する教育方針を挙げる。貧乏士族の子として生まれ、苦学して東京専門学校（のちの早稲田大学）邦語科行政科を出た幹治のことを丸山は以下のように語る。

わたくしの父は信州で、貧乏士族の子ですからお百姓をしていたわけですが、「新日本之青年」を片田舎で読んで、感奮興起して、親に無断で家出して上京して、そのため勘当になったぐらいです。（「丸山眞男教授をかこむ座談会の記録」1968）<sup>(31)</sup>

それで親父はよく言っていた。日本の社会では帝大を出れば、馬鹿でもある程度いく。帝大を出ていないということのために、どれだけ損するかわからない、実に下らないやつがただ帝大出ているというだけで黙ってどんどん出世していくというのだよ。だから僕らにお前たちは学校出たら、社会主義者になろうと、共産主義者になろうと、一切干渉しない、自分の好きな道をいってくれ、ただ学校だけは出してくれ、学校出ないと、日本では実際に損するのだということを行いましたよ。それはよほどこたえているんだな。新聞みたいの比較的自由的な世界でもね。（「1月13日丸山眞男先生速記録」1959）<sup>(32)</sup>

幹治は子供に成績優秀であることを求めなかったが、自らの経験から学校だけは出してくれ、と言ったという。「学校時代はトップだった」というセイと、苦学して新聞記者になり学歴に対して複雑な感情を抱かざるを得なかった幹治だったが、幹治は職業柄飛びまわってほとんど家におらず、学校の勉強を見るなどの教育は、圧倒的にセイが多くを担っていたようである。実際に1922年、丸山が8歳になる年の日記を見ると「かへつてすぐ英語を習ひにお母さんで行った」（1月13日）、「かへるとすぐ

英語を習ひに井上へ行った」(1月14日)<sup>(33)</sup>という記述がある。井上亀六の項でも触れたが、丸山家と井上家の距離は大変近かった。丸山家は1922年に四谷愛住町に移転しているが、これは亀六の探した井上の近所の借家であったという。またそこには『日本人』以来、関係のある人々が集中して住んだ場所であった<sup>(34)</sup>。丸山はここから通った四谷第一尋常小学校のことを回想して以下のように語っている。

第一尋常小学校というと——第一というのは大体みんな有名校ですが、この四谷第一は有名校とはほど遠い学校でして、四谷でいうと第二が左門町の近所にあつて、これが名門校なのです。〔…〕

第一というのは、私の家の少し奥に引込んだところに鯨カ橋というスラム街がありまして、クラスの少なくとも三分の一はスラムの子です。もちろん、鯨カ橋小学校というのはありましたけれども、鯨カ橋小学校に入りきれなくて、スラムの子供が来ていました。私たち兄弟がスラムの子供と遊ぶのを母が非常にいやがりましたが、私はスラムのどん底の子供ともよく遊びました。(「如是閑さんと父と私」1985)<sup>(35)</sup>

「スラムのどん底」の子供かどうかは不明であるが、このころの丸山の日記には友達と遊んで楽しかったという記述が確かにある。そのほか、しょっちゅう学校で喧嘩をした様子も書かれ<sup>(36)</sup>、非常に子供らしい学校生活を送ったことがうかがえる。その一方でセイが学校で習う前にそろばんを教えていることなども書かれ、セイの教育熱心さの一端がわかる<sup>(37)</sup>。

その後、丸山は当時の7年制高校である武蔵高校を落ちて府立一中へ進む。以下の回想でも、教育に関するセイと幹治の違いが述べられるが、セイは一中から一高というコースを望んでいたと丸山は語る。

府立一中というと、いわゆる名門校ということになっているけれども、その当時、入るのがいちばん難しいのは七年制高校です。官立では東京高校。私立はいくらかやさしくなるけれども、難しいのは武蔵高校。それから成蹊、成城が七年制高校でした。ぼくの兄貴〔丸山鐵雄〕は〔中学は〕武蔵でしたが、ぼくは武蔵を落ちてしまったのです。親父〔丸山幹治〕は学校なんてどうでもいいという考えに徹底していて、その点、おふくろ〔セイ〕と全く違う。おふくろは、今でいう教育ママです、ちょっと意味が違うけれど。侍の娘で厳しいから……。

〔…〕ただ、おふくろは昔風の学歴主義ですから、一中へ行くと一高〔第一高等学校〕へ行けるというので、一中—一高というコースを望んでいました。（『定本 丸山眞男回顧談』（上））<sup>（38）</sup>

これまで丸山の回想を通して見てきたように、セイは真面目で教育熱心な母親であつたらしい。しかし、丸山は兄鐵雄（1910-1988）からの影響で早くから映画館に通うなど、いわゆる「優等生」にはならなかった。

もし、ぼくが都会のいわゆる学校優等生と、ちょっと違ったところがあるとすれば、もっぱら兄貴のおかげだと思って感謝しています。探偵小説も、兄のっていた『新青年』という雑誌で中学の初期から愛読していました。おふくろはそういうことを非常にいやがりました。〔…〕ぼくの年齢で無声映画を観ている人はほとんどいない。大体映画を観出すのは、ふつうは高等学校からです。中学でも早いらいなのに、ぼくは小学校から、無声映画を観ている。それはもっぱら兄貴の影響です。文部省推薦映画というのがあって、そのときだけは「お母さんいいだろ、これは文部省推薦映画だ」と言っていて……。二本立てなので、もう一つのほうを観たいわけ。推薦映画

だとおふくろがいいと言うのです。[...] あるとき塾に行くのをサボって映画を観たのです。緋の着物を着ているのですが、洗濯するときに、中からモグリが出てきて、おふくろにバレてしまった。そのときに母が「兄さんはもうしょうがないと思っている。あんただけは信用しとった」と萩の言葉で泣いて言いました。ほくも言葉がなかったけれど。(『定本 丸山眞男回顧談』(上))<sup>(39)</sup>

子供に対して文部省推薦の映画なら観に行っても良いという姿勢であったセイだが、彼女自身の教養について丸山の証言が残されている。

その坪内逍遙から、島村抱月・松井須磨子・これは新劇の一つのはしりになるわけでしょう。私の母などは、松井須磨子をよく見に行ってるわけ。松井須磨子がカチューシャの歌を吹き込んだレコードがうちにあります。ああいう新劇運動が如是閑も含めて一種の教養目録になっていた。「アルト・ハイデルベルク」を演じる須磨子の話を、子供のときに母から聞きました。(『如是閑さんと父と私』1985)<sup>(40)</sup>

松井須磨子はイプセン『人形の家』(坪内逍遙訳1892年、島村抱月訳1910年)の1911年初演においてノラ役を演じ、大きな反響を呼んだという。1911年は『青鞥』が平塚らいてうを中心に創刊された年であり、日本の女性解放運動に大きな展開があった年だと言える。『青鞥』の女性たちは「新しき女たち」の名を冠され、ノラのイメージと連想されるようになっていったようだ<sup>(41)</sup>。このように『人形の家』の上演、『青鞥』の創刊を経て「新しい女」という言葉がジャーナリズムで盛んに使われた。1913年1月、平塚らいてうは『中央公論』に「新しい女である」を発表、『青鞥』1月号の付録「新しい女、其他婦人問題に就いて」には平塚らいてう訳、エレン・ケイ「恋愛と結婚」が掲載されたほか、伊藤野枝、岩野清子、加

藤緑、長曾我部菊らが論陣を張った<sup>(42)</sup>。

セイは1909年に幹治と結婚し、『人形の家』の抱月訳が刊行された1910年には長男鐵雄を出産している。セイが家庭を持ち、出産を経験した時期は、女性解放運動の黎明期であった。

## 対照的な母と父

前に述べたように、子供への教育方針も、一種の「教育ママ」だったセイと、「学校なんてどこでもよく、また成績などはテンデ問題にしない」幹治はまったく対照的であった。しかしこの二人の違いは学校の成績だけに限ったことではなかったようだ。

あれも小学校のときでした。ふつうは家の傍だから四谷館というのに行くのですが、兄貴と日曜日に浅草へ行こうとしたら、母が「いけない」と言うんです。ほくらの目の前で親父とおふくろと喧嘩がはじまった。親父は、あんまり抑えるから、かえってカツドウを観たくなるので、たまには観させたほうがいいんだ、と言う。母はあそこは不良の巣窟だと言う。二人で言い争っているから、兄貴が「おい、今のうちに早く行っちゃおう」と言って二人で飛び出したのを覚えています。日曜をまる一日潰して三つ映画館を回って観たんです。映画に対する態度だけではないのですが、父と母は対照的でした。[…]

だいたいにおいて、兄弟はみな、プロ母で、アンチ親父なのです。成長して後から、親父はいいことを言ってくれたなと思うようになった。両方対照的だったから、よかったということも言えるのではないかな。ずっと後ですけど、ほくが東大の助教授になりますと、「叙 従七位」という辞令が来るのです。戦後はないけれど。助教授は高等官で、助手は判任官です。おふくろは、それを仏壇に上げて

拜む。親父は火鉢に当たりながら「お稲荷さんにはまだ遠いなあ」と言う。お稲荷さんは正一位なんです。そういう意味では、ほんとは対照的でした。（『定本 丸山眞男回顧談』(上)）<sup>(43)</sup>

## 母からの影響としての親鸞

対照的な母と父であったが、ことにセイの信心深さについて、上記の対談や回顧談と対応する丸山の語りは前出の古在との対談(1966)や『『著作ノート』から長野オリンピックまで』(1988年6月)にも残されている。

教育勅語とか、学校でつめこまれるドクトリンとしての国体に対しては中学のときから反発していました。親父なんかは天子さん、天子さんといっていました。思想問題については、当時としては実にリベラルだったと思います。根っからのジャーナリストで、哲学とか「理屈」はきらいですが、むしろその意味で明治の啓蒙主義と実証主義の血をひいている。宗教は阿片だという意味を中学生の私なんかに説明して、信心深い母親の顔をからかうように見たりしていた。(古在・丸山対談、1966)<sup>(44)</sup>

丸山によれば、母方は熱心な浄土真宗だったという。「僕の母方は、政教社の井上亀六を含めてものすごく熱心な浄土真宗ですから。伯父の家は仏教関係の本で埋まっていました」<sup>(45)</sup>と丸山は母方からの影響について尋ねられた際に答えている。古在との対談の折にも「宗教は阿片だ」という父幹治の言葉とともに母の信心深さに触れたが、1988年には、同じエピソードを語りながら、宗教に対する態度が「父と母とのもっとも重大な違い」だとして対照的な父母の姿にもう一步踏み込んで語っている。

まさにそれ〔筆者註：親鸞〕は母方の影響なんです。それが父と母

とのもっとも重大な違いです。中学校の頃、親父は大阪毎日〔新聞〕にいたけれど、時々東京に帰ってきてダベるでしょ。そうしたら、俺はマルクスが宗教は阿片だと言ったのは賛成だと言うんです。僕はまだマルクスのマの字も勉強していなかった。マルクスのあそこだけは少なくとも賛成だと。なぜ宗教が阿片かということを親父は説明するんですよ。現実の矛盾を彼岸の問題を持ち出すことによりそらすと。いかにも死んだら救済されると言うけれど、そうすると現実にはいかに不満があり、矛盾があっても、死んだら救済されるのだからということで、そらす役割。それを阿片だとマルクスは言った。俺は賛成だなど。お袋がこうやって下を向いてつらい顔をしていたのを、いまでも覚えています。それは明らかにお袋をからかっているのです。〔…〕 だけど伯父〔筆者註：井上亀六〕が人格者なものだから、母親は伯父一辺倒なんですよ。伯父は熱心な浄土真宗の信者で、『日本及日本人』の系統では井上円了とか、かなりいます。〔…〕

とにかく〔お袋は〕浄土真宗一辺倒です。大庭家が浄土真宗ということもあって。伯父のほうは少なくとも選び取った浄土真宗です。伯父はともかくとして、お袋は〔熱心な信徒とは〕見えないですけど、非常に信心深い。宗教的敬虔さを持っていた。だから兄貴も僕も、中学までは食事の前に毎朝仏壇に手をあわせて拜んでいました。高等学校では寮に入ったこともあって、俺は仏教を信じていないのになぜ拜むんだと考えて、結局拜むのをやめちゃったんです。どうでもいい話ですけど、その頃ですから、助教授になると、従七位に叙せられ、このくらいの位記がくるんですよ。お袋はすぐそれを仏壇に上げて拜むでしょう。親父はそれを見ながらハハハと笑って、お稲荷さん〔の正一位〕にはまだ遠いなど。(笑) 親父は徹底して反宗教なんだな。それが夫婦があまりうまくいかなかった理由の一つなんですけれど、僕ら兄弟はみんなお袋派でしたね。『歎異抄』も何も読

んでなくて、ただ祖母が言ったことや、お袋が断片的に言ったことを通じて、影響と言ったらオーバーだけれど、学問とか知識とかそういうものとはかかわりなく、受けていました。道徳と宗教というのは、違うんだな。宗教はこの世の道徳を超越しているんだな、と知らないうちに覚えましたね。

『歎異抄』を読んだのは助手になってからです。やっぱり非常に感動しましたけれど、そういう素地があったから読んで感動したのであって、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」というのは、今でもそう思うけれど、世界的な思想ですよ。（『著作ノート』から長野オリンピックまで）1988）<sup>(46)</sup>

思想としては幹治に賛成し、仏教を信仰していなかった丸山だが、『歎異抄』も何も読んでなくて、ただ祖母が言ったことや、お袋が断片的に言ったことを通じて、影響と言ったらオーバーだけれど、学問とか知識とかそういうものとはかかわりなく、受けていました。道徳と宗教というのは、違うんだな。宗教はこの世の道徳を超越しているんだな、と知らないうちに覚えましたね」という語り口からは、信仰とは異なるレベルで宗教に対する理解が養われたことがうかがえる。「学問や知識とかそういうものとはかかわりなく」受けた母からの影響によって『歎異抄』に感動する素地が形成された。親鸞を「世界的な思想」と捉え、信仰を持たずに読み解くことのできる丸山の眼は「宗教的敬虔さ」を持った母の存在を通して、生活のなかで育まれたものではなかったか。

のちに鶴見俊輔との対談「普遍的原理の立場」（1967）において丸山は、「東洋対西洋」や「日本対外国」という単純化された二項対立的図式を「きらいだ」と評し、日本と「外国」のように、諸外国を十把一絡げに表現することに強く異を唱えている。その上で、「外国」は中国に代表されていたが、明治以後、「欧米」がその位置に代わっただけだという。この

ような過程をコスモポリタニズムからは程遠いものとみなし、むしろ道元や親鸞に「コスモポリタニズムみたいなもの」があると丸山は評価している。「やはり、普遍宗教ですから、真理に直接個人が向き合う、一種の世界市民主義みたいになる」<sup>(47)</sup>と述べる丸山の態度は、コスモポリタニズムの契機をあえて明治以降受容された「欧米」に求めずとも、日本思想には「一種の世界市民主義」となり得る思想が内包されていると読める。このような親鸞に対する丸山のアプローチの仕方には、祖母や母セイの素朴であるが厚い信仰心を通じて、生活のなかに根づいた思想としての強度を体感したことも無関係ではないだろう。

一方で、「それが夫婦があまりうまくいかなかった理由の一つ」という丸山の言葉を素直に受け取るならば、家庭では横暴であり、経済的に安定せず、信仰心を子供の前でからかう夫との夫婦関係は単純に幸福であるとは言い難かったのかもしれない。丸山は社会的には「リベラル」なジャーナリストであった幹治の家庭での横暴さ、社会的には「右翼」でありながらも「人格者」であった亀六を自己形成の過程で目の当たりにしていた。この丸山の視点には、丸山にとって一番身近な人物だった母への共感も媒介となっていた可能性がある。

## 母の死と敗戦

「丸山眞男略年譜」<sup>(48)</sup>によれば丸山は太平洋戦争開戦後、30歳になる1944年3月にゆかり夫人と結婚、7月には二等兵教育招集により歩兵第50連隊（松本）に応召され、歩兵第77連隊（朝鮮・平壤）に転属する。その後10月に招集解除されるが、翌45年3月、広島市の陸軍船舶部隊に応召し、暗号教育を受ける。丸山によればセイが倒れたのは「応召で広島へ行く前」<sup>(49)</sup>であったという。『定本 丸山眞男回顧談』（下）の補注によれば、丸山は3月7日に応召した後、4月21日から26日にかけて特別休暇で帰京し、多くの知人であったという<sup>(50)</sup>。丸山自身も、母が病気な

ので休暇をもらい3日ほど帰京したことがあると述べたことがある。ゆかり夫人の回顧においても、丸山の帰営に際して、セイがおはぎか何かを作って持たせたという。そのセイが亡くなったのは敗戦の日であった。

全く個人的な話になるけれど、終戦というのは僕は躍り上がるほど嬉しかった、さっきの副島くんじゃないけれど。そしたら一六日ごろ、「おい丸山、電報だ」と言うのです。見たら、「ハハシス ソウギバンタンスンダ チチ」と書いてある。まいったな、あのときは。ほくに電報を渡してくれた人が、「どうしたんだ」と言うから、「母が亡くなりました」と言ったら、「そうか、じゃあ休暇やろうか」と言いました。だけど「いいえ、いいです」と。どうせほくは復員するんだから、休暇をもらって、また帰って来るというのは憂鬱ですから。母親〔丸山セイ〕は八月一五日、ちょうど終戦の日に死んでいるわけです<sup>(51)</sup>。ほくの知らないときだけれど、子どもの中で弟の邦男だけ家にいたのです。邦男とほくの女房とが看病役で、親父がいた。棺も自前でつくらねばならぬという時代です。筆筒を削って白木にして、それをお棺にしたらしい。また、焼き場に燃料を持っていかないとだめなんです。庭木を切って火葬場に持って行って、それで焼いたらしい。大変だったと思うんです。あのニュースぐらい空しいことはなかった。柔道場がとなりであって、そこで転げまわって泣いたな、誰も見ていませんから。(『定本 丸山眞男回顧談』(上))<sup>(52)</sup>

丸山にとって、「躍り上がるほど嬉しかった」終戦の日の印象は、母の死によって大きく変わったに違いない。丸山は戦争から解放された喜びから、一挙に空しさに突き落とされたのであろう。敗戦と母の死を語る際に「私にとって毎年八月十五日という日ははなはだ複雑な気持を覚えます」と丸山はその心情を表現している。

実は私、この集会にまいる前に多磨墓地に行ってみりました。はなはだ個人的なことを申し上げて恐縮でございますが、八月十五日というのは、私の母の命日でありまして、しかも私の母は昭和二十年の八月十五日、敗戦の日に亡くなったのであります。私は当時兵隊で広島市の宇品におりまして、母の死に目に会えませんでした。ですから私にとって毎年八月十五日という日ははなはだ複雑な気持ちを覚えます。正直のところこの日はなにかひっそりとすごしたいという気持ちです。大体個人的な体験とか実感とかいうことを公の場で話しますのは、実は私の個人的な趣味に合わないのですが、八月十五日についてなにかしゃべれといわれますと、そういう個人的な体験をぬきにしては私としては語れない感じがいたすのであります。

私は戦後、なにかの折に「ああ、おれは生きているんだなあ」とふっと思うことがあります。というのは、なにか私は間一髪の間によって、戦後まで生きのびているという感じがするのです。それはあの苛烈な戦争をくぐった国民の方々でおそらく同じような感じ方をなされる人も少なくないと思います。私もその一人であります。（「二十世紀最大のパラドックス」1965）<sup>(53)</sup>

上記の文章ではナルシズムを嫌う丸山らしく、抑制を効かせつつ淡々と、しかし深い悲しみを滲ませて敗戦の日の母の死を語っている。だが教え子の高野耕一が母を亡くしたことを綴った手記を送った際の丸山からの返信には、母を喪った悲しみがより直接的に書かれていた。

私も戦争が終ってア、これで母に会えると思ったところへ、電報で死を知らされた時の渦巻のような感情の沸騰や、復員して家に帰り、父妻、兄弟にロクに挨拶もしないでまっすぐに位牌に歩みよっ

て「只今帰りました」といったまゝ、ワッと泣き出した時のことを昨日のように生々しく覚えていますだけに、この世に二つとなく愛された御母堂の臨終に間に合わなかった貴兄の御気持には文字通り Mit-leid を感じます。ふつう悲しみは時間に比例して薄らぐといたしますが、私など今でも、顔を洗おうと頭を下げた時とか、長い廊下を歩いているとき、といった全く何でもない一瞬にフト母にもう会えないという悲しみが胸をえぐるように襲って来ます。(丸山眞男、高野耕一宛書簡、1954 頃)<sup>(54)</sup>

高野によると、彼の母が亡くなったのが昭和 29 年ということだから、上記の引用は 1954 年に書かれたと推測される。その前に引用した二つの聞き書きに比べると、敗戦から 9 年しか経っておらず、また個人間の書簡ということもあるだろうが、より丸山の肉声に近いという印象を受ける。戦争が終わったにもかかわらず母を喪ったこと、母の死に目にあえなかったことが丸山にとって容易に癒えることのない悲しみであったことは疑いがないだろう。

加藤周一にとって敗戦は解放そのものであったが、戦争の終結と同時に母を喪った丸山にとって、敗戦の日の記憶は母の死と分かちがたく結びついていた。加藤は解放のエネルギーと天皇制や戦時期知識人への怒りを発表することから戦後出発した。丸山の戦後は解放と同時に空しさや悲しみを抱え、自身も受け入れていた「重臣リベラリズム」を分析することから始まった。

## 母たちの歌

敗戦の日に亡くなったセイであるが、死の床についたセイは、娘時代以来、何十年と中断していた歌作を再開させていた。その歌の中から丸山は、出征した自分のことを案ずる歌を紹介している。個人的な事柄を

話すことを嫌い、ナルシズムを嫌った丸山であるがゆえに、ナルシズムを超えて語られる母の姿は、同時代の多くの日本の母の姿と重ねて読むことができる。

戦前と戦後のちがいかいということがあちこちでいわれますが、ここでも私は自分の身辺的な話をするをお許し願いたいと思います。私は先ほど申しましたように、結局母の死に目に会えなかったわけですが、死ぬ直前に私の母が病床でいくつか歌を作りました。娘のときにやったきり何十年、歌など作らなかったのですけれども、死の直前にどういうものかそういう気になったようです。その歌のなかに、出征していった私を詠んだ歌が一、二あります。非常に恐縮ですが、その一つをちょっとここで読ませていただきます。

それは「召されゆきし吾子をしのびて病床に泣くはうとまし不忠の母ぞ」というのです。私はこの歌が巧みであるとは思いません。しかし最後の病床にあって、天皇陛下のお召を受けて戦争に行くのは名誉なことと思わねばならぬという、そういう明治に育った母の規範意識というものと、にもかかわらず出征の日の朝の別れを思い出しては泣く自分——自分是不忠の母だ、これではいけない、という気持と、やはり自分是不忠でもこの切ない気持を押さえようがないという、その二つの感情のあいだに引き裂かれたまま死んでいった母を思いますと……ほんとうに痛ましくなります。これは明治の時代に育って、わが子を戦地におくった数多くの母に共通した感情であったと思います。(「二十世紀最大のパラドックス」1965)<sup>(55)</sup>

丸山はノート「春曙帖」に「亡母が最後の病床で詠んだ歌」として、8首書き写している。

召されゆきし吾<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>をしのびて思ひ出に泣くはうとまし不忠の母ぞ  
自らを戒めつつも病床に別れし朝の思ひ出に泣く  
健<sup>あ</sup>やけ<sup>こ</sup>き吾<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>を夢みし<sup>あかとき</sup>暁は楽しくもありはかなくもあり  
こほろぎの脚に似たりとわが四肢を出せどわが子は笑はざりけり  
惜しからぬ命なれども只一つ心残れり生きんと思ふ  
寒のうちに寝つきてはやも桜咲く頃といなりぬ腕の細さよ  
春雨の煙れる日なり二た月のながき病床に落ち髪拾ふ  
たなぞこに玉蘭の葉をそと載せて吹さてもみたき春心地かな<sup>(56)</sup>

丸山が紹介した「召されゆきし吾<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>をしのびて思ひ出に」の歌のほか、「自らを戒めつつも病床に」も、出征した丸山のことを詠んだ歌だと推測される。さらに「健<sup>あ</sup>やけ<sup>こ</sup>き吾<sup>あ</sup>子<sup>こ</sup>を夢みし<sup>あかとき</sup>暁は」では、明け方にまどろみつつ、元気な子どもの姿を夢の中に見たときの楽しく儂い気持ちを詠んでいる。離れている子供の姿を夢に見たのであろうから、これも丸山を詠んだ可能性がある。「こほろぎの脚に似たりとわが四肢を」では、おそらく病のために痩せほそってしまった四肢を見せ、こほろぎのようだと冗談めかしたのだろう、笑うことができなかつた子を詠むことで、病の軽くないことが静かな悲壮感として伝わる。ここまで8首のうち4首であるが、この4首は全て子どものことを詠んだ歌である。

さらに「惜しからぬ命なれども只一つ」は、「惜しからぬ命」と「生きんと思ふ」という相反する語を「只一つ心残れり」でつなぐ非常に微妙で力強い均衡をもつ歌。病の現実を見定めながらも「生きんと思ふ」と自らの意思を表明して結ぶ。セイの忍耐強さと、意思の強さを垣間見ることのできる句である。

丸山は母の歌からも影響を受けたことを以下のように語っている。

歌は、顧みてみれば、ほとんどおふくろの影響でしょうね。母は

文学少女で、少女時代から短歌雑誌のレギュラー投稿者なのです。どこかへ行ってしまったけれど、かなり載ったものをぼくは見せられました。それで、短歌をつくっていましたが、百人一首も母から教わったのです。〔…〕そんなにはないのですけれど、ときどきつくって、その歌が小学生雑誌なんかに掲載したこともあります。要するに、好きだったという、ただそれだけのことです。日記みたいなものを見ますと、下手くそだけれど、ときどき歌が載っています。（『定本丸山眞男回顧談』（上）<sup>57</sup>）

丸山自身、後年日赤病院へ入院した際、「春曙帖」へ当時の心境を詠んだ句を綴っている。病床にあって、歌を持って自己と向き合う丸山の姿は、セイと相似形である。

加藤の母、ヲリ子も胃がんのため病床に臥したが、手術の後ふたりの子に宛てた歌を詠んだ。加藤はこの歌の書かれた紙を、母の歿した日の日記に貼り付けている。ヲリ子がのこした歌は以下の2首である。

母が命守らんとしてまやく否みて子は断固たり  
つよき兄やさしき妹よ母は今しみじみ己が幸を知りたり<sup>58</sup>

加藤は病に倒れた母を医局に勤めながら献身的に看病したという。ヲリ子もそのことを痛感していたようだ。手術を前に、おそらくは遺言となる可能性も覚悟して書いた手紙の封筒には「周一ありがとうよありがとうよ切角の骨折にむくひられずかに〔筆者注：堪忍〕して下さい」と記されていた。「母が命守らんとして」の一首は、加藤がヲリ子の治療について「まやく否みて」、おそらくモルヒネ等の投与を断固として拒否したのだろう。「母が命守らんとして」と病床のヲリ子に詠ませるほどの、加藤の必死さが伝わる。またもう一首は、二人の子どもに対する深い愛情

を詠む。ヲリ子は加藤宛の手紙にも、当時の妻綾子宛の手紙にも、妹久子を頼むと念をおしている。加藤家において、母と子の愛情の非常に強かったことが窺える。

#### (4) 終わりに

丸山・加藤の母、セイもヲリ子も、死を目前にして、子を想う歌を詠んでいる。丸山は自ら発表することがなかったが、1969年3月に心不全と肝炎のために武蔵野日赤病院へ入院した際、歌を5首ノートに書きつけている。69年は1月に東大紛争のさなか全共闘系学生の妨害と吊るし上げにあい政治思想史の講義を3回にわたって中止し、これが丸山の東京大学における最後の講義となるなど、丸山にとって過酷な年だった。

一九六九年四月十八日、日赤病床にて  
夜半にふと目覚むればいま見し夢は東大紛争のほかにはあらず  
ついに解せぬ問い一つありこの長き紛争のはてに残るは何か  
ドアより慰問文来る

巧みなる倭語をつゞりて慰めの文を寄するは異国の友なりき  
たたかいのさ中というに「非政治的人間の省察」を書きし人あり  
声あらくわれをなじりしも花もちて訪い来るも東大生にして<sup>(59)</sup>

この5首は全て自問自答の歌であり、反語的な表現で詠まれた歌が目立つ。長き紛争のはてに残るものは何もなく、慰めの文を寄して丸山を慮るのは異国の友でおそらく同僚ではなかった。「声あらくわれをなじりしも」などは、丸山の相反する複雑な胸中が垣間見えるようだ。これらの丸山の歌は、セイと同じく、忍耐強く自らを厳しく律することのできる人間が人生における不条理に直面したときの苦悩に満ちている。丸山

はこの歌を詠んだ後、71年に東京大学を辞しているの、大学教授としての丸山の最後の歌である。

加藤周一も詩をよくしたが、丸山と異なるのは女性を愛したとき、その歓喜や懊悩を詩に託したという点である。丸山、加藤ともに、人生の重大な局面で歌を詠み、詩を書いている。彼らは母の歌の記憶を頼りに、自らの内面と向き合う方法を模索したのではないだろうか。

セイとヨリ子の共通点は、歌のほかに子どもの教育に熱心であったこと、夫との口論も辞さなかったこと、信仰心が厚かったことが挙げられる。セイもヨリ子も、自らの信念に従って行動し、子供を愛し育てた人物であることが、丸山、加藤の残した文章から読み取ることができる。セイとヨリ子の生涯をさらに知ることによって、近代日本知識人の家庭と、母たちが彼らの自己形成に与えた影響をより詳しく分析したい。というのも、母の教え、母の性格がどのように丸山や加藤に影響を与え、彼らの考え方に反映したかを探ることが重要であると考えられるからだ。

しかし、それと同時に、「妻」や「母」といった類型にはめられない、ひとりの人間としての丸山セイ・加藤ヨリ子の姿を見出すことが不可欠である。彼女らが遺したテキストがほとんどなく、語る主体である丸山や加藤の視点を通して彼女らを見ることを本稿で試みたが、これだけでは「母」の視点で見ているといえない。また、偉大な政治学者を産み育てたという理由でセイに研究する価値があるというわけではなく、むしろ、近代知識人を相対化するためにもセイ個人がどのような人物であったかを論じる意義がある。

今後の展望として加藤と母の関係との比較のみならず、鶴見と母の関係とを比較することで、近代日本の「母」がいかなる存在であったかを探ることを目指したい。

## 註

- (1) この共同研究は2022年度サントリー文化財団研究助成「学問の未来を拓く」の助成を受けている。共同研究の研究メンバーはルボフスキ・伊藤綾、井上裕美、翁家慧、劉争。
- (2) 先行研究としては、丸山眞男の「評伝風思想案内」である荻部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波書店、2006）、また「母」イメージや役割についての比較研究を行なった高田京比子・三成美保・長志珠絵編著『〈母〉を問う——母の比較文化史』（神戸大学出版会、2021）が挙げられる。
- (3) 『丸山眞男集』第十六巻、岩波書店、1996、138頁。
- (4) 古在由重・丸山眞男『丸山眞男対話篇1 一哲学徒の苦難の道』岩波書店、2002。対談の初出は『エコノミスト』（1966年6月14日号-8月23日号、毎日新聞社）。
- (5) 前掲『丸山眞男対話篇1 一哲学徒の苦難の道』203-204頁。
- (6) 丸山眞男『自己内対話』みすず書房、1998、241頁。
- (7) 松沢弘陽、植手通有、平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談』（下）、岩波書店、2016、351頁。
- (8) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』（下）、347頁。
- (9) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』（下）、354-355頁。
- (10) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号363-1、1985年。
- (11) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、87頁
- (12) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、130頁。
- (13) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、143頁。
- (14) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、130頁。
- (15) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、132頁。
- (16) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号341-2「小学3-4年生 当用日記帳」。
- (17) 丸山の1922年1月4日の日記には「今日ははくのおぢさんの、うまれた日だ」という記述がある。翌年の日記にも同様の記述があり、1923年の

日記帳の「我が家の記念日」には「祖父明治六年一月四日」と書かれる。祖父が明治6年生まれだとすると、母セイが明治17年生まれとの整合性がとれないこと、井上亀六の生年が1874年（明治7年）であることから、この「祖父」は叔父を指し、1月4日生まれの「をぢさん」は亀六であろう。

- (18) 第4回加藤周一現代思想研究センター・丸山眞男記念比較思想研究センター共同展示「知識人の自己形成——丸山眞男・加藤周一の出生から敗戦まで」(<https://www.ritsumeai.ac.jp/lib/f09/040/>)参照。本展示は2023年3月に筑摩書房より、山辺春彦・鷺巣力共著、東京女子大学丸山眞男記念比較思想センター・立命館大学加藤周一現代思想研究センター監修『丸山眞男と加藤周一——知識人の自己形成』（筑摩選書）として刊行される。
- (19) 鷺巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018、21頁。
- (20) 立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ「JOURNAL INTIME1948 1949」「le 4 janvier」管理記号 655-4 参照。
- (21) 『丸山眞男話文集』続2、みすず書房、2014、26頁。
- (22) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号 341-5「丸山眞男『恐るべき大震災大火災の思出』」。
- (23) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、163-164頁。
- (24) 『丸山眞男集 別集』第二巻、岩波書店、2015、173-174頁。
- (25) 松沢弘陽、植手通有、平石直昭編『定本 丸山眞男回顧談』（上）、岩波書店、2016、54頁。
- (26) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』（上）、105頁。
- (27) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、179頁。
- (28) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』（下）、43-44頁。
- (29) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』（下）、181頁。
- (30) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、165頁。
- (31) 前掲『丸山眞男集』第十六巻、87頁。
- (32) 前掲『丸山眞男集 別集』第二巻、177頁。
- (33) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号 341-1「小学

2-3年生 当用日記帳」1922年。

- (34) 前掲『丸山眞男集』第十六卷、157頁。
- (35) 前掲『丸山眞男集』第十六卷、157頁。
- (36) 以下は一例である。「安竹くんとけんくわした」(1922年2月6日)、「学校で清水くんとけんくわした」(1923年2月1日)、「学校で榎本のやらうとけんかした」(1923年2月27日)、「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号341-1「小学2-3年生 当用日記帳」1922年、および資料番号341-2「小学3-4年生 当用日記帳」1923年。日記によると清水くんとは2日続けてけんかし、榎本くんについては翌日の日記に「榎本のやらうおせいじつかつてやがる」と書いている。
- (37) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」所蔵、資料番号341-2「小学3-4年生 当用日記帳」1923年。3月26日の日記に「お母さんにおととひから、そろばんを習った」とある。学校でそろばんを初めて習ったことが4月12日の記述にあることから、セイが前もって教えていたことがわかる。
- (38) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(上)、20-21頁。
- (39) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(上)、26-27頁。
- (40) 前掲『丸山眞男集』第十六卷、208頁。
- (41) 南谷覺正「『人形の家』について——ジェンダー・イデオロギーと文学」『群馬大学社会情報学部研究論集』第13卷、2006、190頁。
- (42) 小田切進編『日本近代文学年表』小学館、1993、95頁。
- (43) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(上)、27-28頁。
- (44) 前掲『丸山眞男対話篇1 一哲学徒の苦難の道』84頁。
- (45) 前掲『丸山眞男話文集』続2、16頁。
- (46) 前掲『丸山眞男話文集』続2、26-28頁。
- (47) 鶴見俊輔『日本思想の道しるべ』、中央公論新社、2022、301頁。
- (48) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(下)、309-327頁。
- (49) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(下)、109頁。
- (50) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(下)、291-292頁。
- (51) 丸山眞男自身も母と同じ8月15日に生涯を閉じる(1996年)。

- (52) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(上)、17-18 頁。
- (53) 『丸山眞男集』第九卷、岩波書店、1996、287 頁。
- (54) 高野耕一「笑顔の中の孤愁」『丸山眞男集』第十六卷「月報 16」、岩波書店、1996、3 頁。
- (55) 前掲『丸山眞男集』第九卷、289 頁。
- (56) 前掲丸山『自己内対話』267-268 頁。
- (57) 前掲『定本 丸山眞男回顧談』(上)、85-86 頁。
- (58) 立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ「JOURNAL INTIME1948 1949」 「MAY 30th」管理記号 655-45。
- (59) 前掲丸山『自己内対話』238-239 頁。

(はんだ ゆうこ 加藤周一現代思想研究センター研究員)

